

〔女性像の系譜展によせて〕

## 「婦女遊楽図屏風」(松浦屏風)の 工芸品の表現について

松浦屏風(全図は表紙のことば参照)には六曲一双の金地屏風に、十四人の遊女と三人の禿、遣手一人が描かれています。背景を省略して、人物だけを描く風俗画は他にもありますが、これほど大きく人物を取り上げた作品は類例がありません。松浦屏風の芸術性を考える上で、ほぼ等身大に表現されたスケールの大きさは重要です。豪華な衣装の表現も作品のスケールの大きさに支えられています。遊女達が身に付ける小袖と打掛が二十一領、畳まれた打掛を加えれば二十二領が数えられます。画面構成においても、人物表現においても、豪華な衣装美を引き立てるように配慮され、人物はまるで集合写真のように静かに並んでいます。様々な意匠に満たされた画面には圧倒的な迫力があります。相当に位の高い遊女たちと思われますが、豪華な衣装を着た遊女ではなく、衣装そのものを直接に見ているような印象さえ受けます。松浦屏風には、豪華な衣装と同様に、遊女の華やかな生活を想わせる多くの工芸品が描かれています。装身具、遊戯具、喫煙具、楽器、文房具、化粧道具など、実に多様な分野に及び、いずれも衣装に劣らぬほど細密に描写されています。その中には、口

ザリオ、ガラスの鉢、煙草や煙管、天正カルタという南蛮貿易によってたらされた工芸品が数多く見いだせます。

左隻の左端に天正カルタ(図1)に興じる二人の遊女が描かれています。黒地に緑の宝尽模様の小袖に白地に巴文様の打掛を重ねて着た遊女と、黒地に緑の縦縞に金の蝶と梅花の模様の小袖を着た若い遊女です。二人の遊女は四枚ずつカルタを持ち、打掛を着た遊女はそのうちの一枚を指に挟んでいます。二人の間には、床の上に一枚のカルタが開けられ、若い遊女の膝元に四枚のカルタが伏せられています。天正カルタには剣のイス、棍棒のハウ、酒盃のコップ、貨幣のオウルの紋標の各十二枚があり、木版で刷った図様に手彩色を加えて製作されます。入念に描かれた天正カルタは、床にあるものはオウルの四、若い遊女が持つものは、わずかにずらして、手前からハウの一、オウルの五、コップの四、イスの二と読み取れるように描いています。寸法においても、描写においても、まさに実物を貼り付けたようです。この場面では、二人の遊女によって天正カルタを扱う手付きまで表現されています。

遊戯具では、天正カルタの他に、

右隻に双六盤(図2)が描かれています。双六も遊女が身に付けるべき嗜みでした。しかし、この双六盤の周囲に遊女はいません。双六盤は座って衣装に香を薫じながら、稚児輪に結う禿に髪を梳かせ、遣手から結び文を受け取ろうとしている遊女の後方に置かれています。この遊女は香、髪梳き、文使いという三つの行為を表していますが、画面構成においては、双六盤も無関係ではありません。双六盤は上面と二つの側面の色を微妙に変えて四角い立体感を明確に示し、その大きさと形状は遊女から禿へ斜めに続き、双六盤にいたる床の広がりや奥行きを暗示しています。この双六盤は画面の奥に描かれていますが、木目などの細部まで写実的に表現され、白く塗った側面には、金泥と銀泥で日輪と秋草が描かれています。盤上には、それぞれ十五個ずつの黒子と白子、一と六の目が出た二つの采と采を振る筒が乗っています。盤上の様子はかなり乱れており、その傍らに置かれた子袋も、口が開かれたままです。この場面では、遊戯中の天正カルタとは異なり、遊戯を終えた後の双六盤の状態が表現されています。

工芸品の表現では、硯箱(図3)にも注目されます。硯箱は左隻の中ほど、萌葱地に花菱亀甲模様の打掛を着て、手紙を書いている遊女の前に置かれています。この位置は画面の最も前景に当たります。硯箱は四隅の角を丸く整え、胴がわずかに張った穏やかな形状をしており、側面に藤蔓、蓋表には田野を飛ぶ三羽の雀が蒔絵

されています。蓋がはずされ、硯箱の中に収められた硯や金属製の水滴、すり減った墨、墨を付けた筆、錐、刀子を見ることが出来ます。それぞれ、入念に描き込まれ、刀子の刃や半ば乾いた硯の質感まで表現されています。しかし、硯箱はかなり前に傾き、遊女との位置関係は不自然です。絵師は硯箱の内側を描くために、敢えてこのような角度で描いたと思われる。

同じような表現は、右隻の上部に描かれた打掛(図4)にも認められます。白地の打掛には、「霜」、「獅」などの意匠化された篆書体の文字が、赤色、青色、緑色、茶色、金色に彩られ、整然と並べられています。この打掛も床から立ち上がり、宙に浮いている様に見えますが、わずかにずらして畳み、少し斜めにする事で、打掛の形状が明瞭に表現されています。文字の意匠においても、畳まれることで上下が逆になり、遠近感を踏まえて、上部の文字の意匠が少し大きくなっています。この打掛の表現においても、畳まれた打掛の状態を説明するために、最もふさわしい角度が選ばれています。

松浦屏風を描いた絵師は土佐派や狩野派などの修養を積んだ絵師ではなく、在野の町絵師と考えられています。豪華な衣装とともに硯箱や双六盤のような調度類の描写にも優れていたことがわかります。松浦屏風の絵画空間には、現実的な光景が表現されているのではなく、現実的な存在感を伝える衣装や工芸品を通して、豪華な遊女世界が凝縮されているようです。(中部義隆)

図1



図2

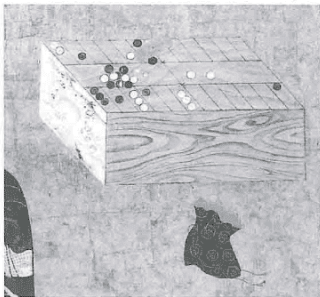


図3

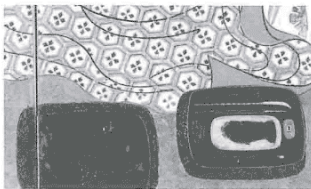


図4



季刊 美のたより No.174

平成23年4月6日

発行 大和文華館